

太平洋戦争の思い出

松井喜久子（三島鴨神社宮司の母）

私にはたいした戦争体験はありませんが、昔を思い出し、個人的な話を少しお話させていただきます。

私が小学校3年生の、昭和20年8月15日に終戦になりました。丁度その一年前の8月に私の父に召集令状が来て、出征して行きました。父はこの三島鴨神社の宮司をしておりました。その時、私は小学校の2年生、次の妹が4歳、一番下の妹は、まだ母のお腹の中に居り、父が出征して2カ月後の10月に3女として生まれて来ました。父と親子の対面もなく、出征して半年後に、フィリピンのコレヒドール島で戦死してしまいました。

出征して間なしに母と、慰問袋に新しい葉書きと大好きだった煙草を詰めて送ったのを覚えています。父からは「お父さんのことは心配せずに、お母さんを助け、妹の面倒を見て、しっかり勉強するように」

と書いてあり、この葉書きを今も大切に持っています。

いよいよ戦争が激しくなり、毎晩警報が鳴り、防空壕に入るため、昼に着ていた服や靴下をきちんとたたんで枕下に置いて寝ました。夜中になると、毎晩警報が鳴り、服を着替えて湯たんぽを抱え防空壕に入り、夜明けまでそこで過ごしました。

毎朝5時に一人のお婆さんが、神社の入り口の階段の下に草履を脱いで裸足でお参りをされていました。きっと“早く戦争が終わりますように”と願ってお参りされていたのでしょう。

私が戦争中、体験した一番恐ろしかったのは、昭和20年7月9日、学校で授業中警報が鳴り終わると間もなく空襲警報が鳴り、



生徒たちがまだ並び終わらないうちに艦載機が頭の上を飛び始め、私たちは蜘蛛の子を散らすように家に向かって逃げ出しました。その生徒らを狙って、機銃掃射で追いかけて来ました。私もよその塀伝いに逃げ、友達の家へ飛び込みました。西面方面へ帰る生徒は、神社の中へ逃げ込みました。その頃の神社は境内を囲むように、笹藪が生い茂っており、大人が入っても周囲から見えないほどでした。

そこに逃げ込んだ生徒を狙って撃って来ました。その弾が拝殿の檜皮葺の屋根に撃ち込まれ、くすぶりながら燃え出しましたが、屋根に届く長い梯子も、若い男手もなく、とうとう拝殿は焼けてしまいました。



それでも、お陰様で逃

げ込んだ子供達は誰一人怪我もなく無事で済んだのは何より幸いでした。その時、横の蔵にも弾が撃ち込まれて壁を突き抜け、蔵の中の長持ちを撃ち抜き、中の布団の綿の中にねじ込まれた不発弾が5発見つかりました。

その後大阪市内に一人で住んでいた祖母が、戦災で家も家財道具も焼かれてしまい、一緒に住むようになりました。そして8月15日に終戦となりました。

終戦後、間なく父の英霊が帰って来ました。箱がカタカタと音がするので、父の何かが入っているのかと、母と開けてみると、英霊と書かれたガリ版刷りの薄い紙が一枚入っているだけでした。

敗戦後、マッカーサー元帥が最高司令官となり、占領軍の至上命令により軍国主義と国家神道を抹殺する施策が進められ、その為、教育改革と神社神道祭礼執行が停止させられました。この境内にも英語と日

本語で書かれた看板が本殿の前に立てられました。

それから母は、大改革の書類を府庁に提出する為、あちこちを訪ね歩き毎晩遅くまで慣れない境内や社殿の凶面など、様々な書類作成に追われ、大変な気苦労を重ねながら病に倒れ、私が中学2年生、一番下の妹はまだ小学校に入学する前の年に亡くなってしまいました。

その後、祖母が私達の面倒を見てくれていましたが、3年後祖母も病気で亡くなってしまいました。私が高校2年生の時でした。私は高校を中退しようかと思いましたが、私達姉妹がこの神社に住まわせてもらうには、神職の資格を取らねばならず、資格取得には高校卒業が条件なので、学校の先生や皆さんに励まされて、何とか卒業し、神職の資格と国家試験を受けて、保母の資格を取ることが出来ました。翌年から高槻市立の保育所に就職する事が出来るようになり

ました。

この戦災で焼け落ちた立派な拝殿は、昭和38年、柱本生まれの大臣、高崎達之介氏の力を借りて、三箇牧の氏子さん達のご協力により復活させる事が出来ました。その記念として蔵の横に高崎氏の句で「三島江のよしあししげき昔よりこの民まもるこの神やしる」の句碑が建てられました。

戦争は勝っても負けても多大な損失と人々の最大の不幸を招きま。特に核廃絶は声を大にして願います。

これ以上の不幸がおきないように。今現在、おだやかで幸せな生活を送れるのも、先人の多大な不幸があつての事ではないでしょうか？

戦争を知らない人達ばかりになりつつある今日、もう一度、一人でも多くの人達に、あの不幸な戦争を知ってもらい、ぜひ戦争のない世界になるよう、皆さんで頑張ってもらいたいと願います。